

# 沢ベリ遺跡第3次発掘調査報告書

主要地方道倉吉由良線緊急地方道路  
整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査



鳥取大学附属図書館



0050294628

平成12年度

倉吉市教育委員会





## 序

この報告書は、鳥取県倉吉土木事務所が実施する主要地方道倉吉由良線改良工事に伴い、平成12年度に倉吉市教育委員会が倉吉市不入岡字沢ベリにおいて実施した発掘調査の記録です。

沢ベリ遺跡は今まで2度の発掘調査が行われ、弥生時代の集落や5世紀以降の古墳群などが確認されています。今回の調査は、道路の拡幅部分のみの狭い調査範囲ではありますが、弥生時代中期から後期にかけての竪穴式住居3棟、掘立柱建物1棟などを確認しました。その内竪穴式住居1棟からはガラス小玉が14点出土するなど、沢ベリ遺跡の内容をさらに充実させることができました。

発掘調査の記録としてこの報告書が多くの方々に活用され、文化財に対する理解を深めていただく一助となることを願うものです。

最後になりましたが、発掘調査に際してご協力いただきました鳥取県倉吉土木事務所、土地所有者の方々をはじめ関係各位に対し深く感謝の意を表するものです。

平成13年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽 一昭



## 例　　言

1 本報告書は、鳥取県が行う主要地方道倉吉由良線緊急地方道路整備工事に伴い、倉吉市不入間字沢べりで行った発掘調査記録である。

2 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長 足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

調査員 横鉾 輝雄（倉吉博物館主任学芸員） 森下 哲哉（文化財係主任）

　　根鉾智津子（文化財係主任） 加藤 誠司（文化財係主事）

　　岡本 知則（文化財係主事） 間平 拓也（文化財係主事）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子・金田 利子

事務局 波田野頌二郎（教育次長 12年9月まで） 景山 敏（教育次長 12年10月から）

眞田 康幸（文化課課長）

中井 寿一（文化課課長補佐 12年12月まで） 渡辺 峰寿（文化課課長補佐 13年1月から）

藤井 晃（文化財係係長） 藤井 敬子（文化財係主任）

山崎 昌子（文化財係主事）

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・松嶋あつ子・竹歳 晴子・山本 鑑・米原 満

4 現場での調査は岡平が、遺物写真は森下が担当した。本書の執筆は各調査員が討論し岡平が行った。

5 1号住居出土炭化材の鑑定を株式会社パラオ・ラボ東海支店に委託した。

6 第1図(地形図)は、建設省国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図(地形図)は、1:2,500国土基本図「倉吉市平面図」を使用した。

7 地図中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。

8 遺物に付した記号・番号は、本文・地図・図版で統一している。

9 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

## 本文目次

I 発掘調査に至る経過	1	第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	2
II 位置と歴史的環境	1	第2図 沢べり遺跡第3次調査区位置図	3
III 調査の概要	4	第3図 1号～3号住居遺構図	5
1 遺構	4	第4図 1号掘立柱建物・1号縦列・1号土塁遺構図	7
2 遺物	9	第5図 沢べり遺跡第3次遺構全体図	8
IV 鑑定	12	第6図 出土遺物1	10
Vまとめ	14	第7図 出土遺物2	11
報告書抄錄		第8図 沢べり遺跡1～3次遺構全体図	15

## 挿図目次

図版1 遺跡・遺構 沢べり遺跡第3次調査前全景	調査後全景	1号～3号住居
図版2 遺構 1号住居炭化材・遺物出土状況	1号住居完掘	2号住居
3号住居 1号掘立柱建物・1号縦列・ピット群	1号土塁	
図版3 遺物 出土遺物		
図版4 鑑定 炭化材の顕微鏡写真1		
図版5 鑑定 炭化材の顕微鏡写真2		

## 図版目次

## I 発掘調査に至る経過

平成11年2月、鳥取県倉吉土木事務所から、主要地方道倉吉由良線改良工事の計画が倉吉市教育委員会に提示され、合わせて埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。計画は倉吉市和田から不入岡にかけての現道の西側を拡幅し、歩道を増設するものであった。開発予定範囲は昭和50年度・平成6年度に発掘調査の行われた沢べり遺跡の中に位置し、現地の分布踏査によつても遺物散布が確認されたため、倉吉市教育委員会は平成11年12月に試掘調査を実施した。その結果、開発予定範囲内で竪穴式住居を確認した。倉吉市教育委員会は鳥取県倉吉土木事務所と協議を行い、工事により削平される最大幅6.6m、長さ77mの部分について発掘調査を実施することとなつた。

発掘調査は、倉吉市が鳥取県から委託を受け、倉吉市教育委員会が主体となって行つた。調査面積は160m<sup>2</sup>、調査期間は平成12年5月17日～6月19日である。

## II 位置と歴史的環境

沢べり遺跡は倉吉市不入岡字沢べりの低丘陵北端に所在する。この低丘陵は、倉吉市西郊に広がる大山火山灰により形成されたゆるやかな丘陵（通称久米ヶ原丘陵）の末端部で、南側には小鶴川の支流である国府川が流れれる。低丘陵は標高約23m前後で、周囲には水田が広がる。丘陵上と水田面との比高差は5mである。今回の調査地は低丘陵が北にやや張り出した部分の丘陵上で、南東に向かってゆるやかに下っていく地形である。昭和50年の1次調査地から東に50m、平成6年度の2次調査地から北に150mの地点にあたる。

沢べり遺跡の過去の調査では、1次調査では、竪穴式住居4棟、掘立柱建物1棟、造出し付き円墳の可能性のある溝などが検出されている。1次調査地から南に約150m離れた2次調査地では、<sup>柱</sup>落しへ4基、竪穴式住居11棟、掘立柱建物50棟、古墳19基、貯蔵穴8基、溝14条などが確認されている。その内古墳群は南北2つの支群に分かれ、南側の支群はやや大型の円墳、前方後円墳、造出し付き円墳が連続して造られており、人物埴輪・家形埴輪などが出土している。沢べり遺跡は、おおむね弥生時代中期から後期にかけては集落が、古墳時代後期には古墳群が営まれた複合遺跡であるといえる。

沢べり遺跡の周辺には数多くの遺跡が知られている。以下遺跡地図（第1図）の範囲を中心に、主に弥生～古墳時代の遺跡を取り上げる。

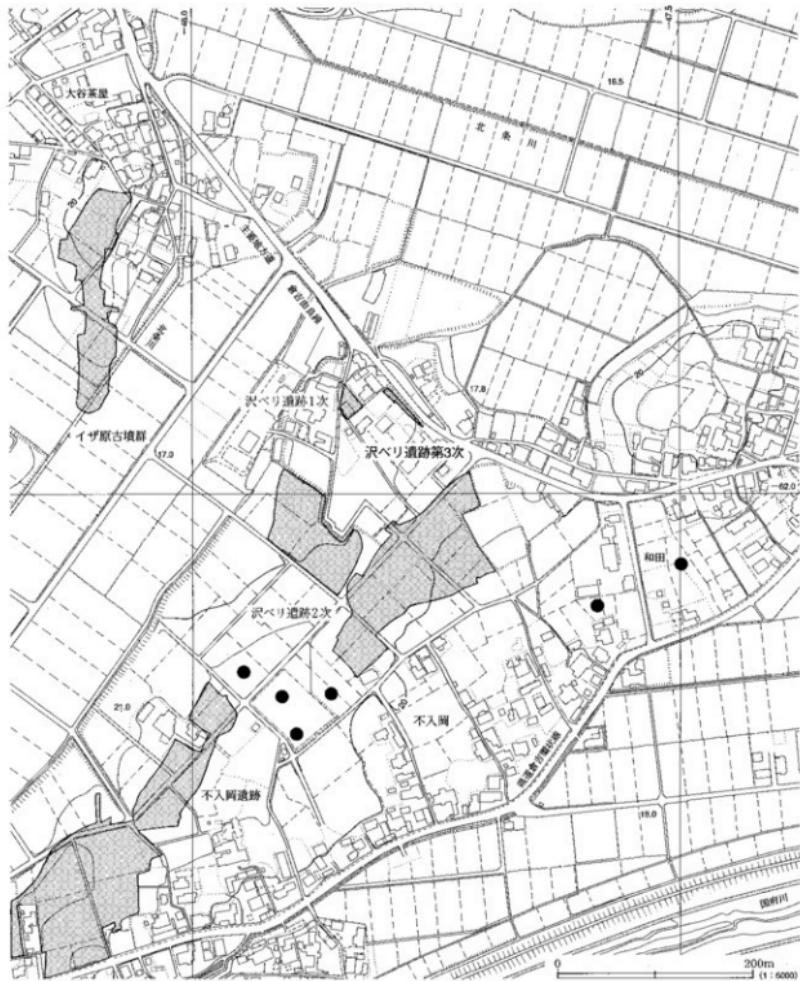
弥生時代前期では、集落は知られていないが、イキス遺跡（1）で土壙墓群が検出されている。中期になると西前遺跡（24）・中尾遺跡1次（56）などで集落が営まれる。北条町米里では銅鐸が出土している（27）。後期の集落は、中期のものは引き継ぎ営まれ、さらに蜘蛛ヶ家山南麓ではクズマ遺跡1次（8）・上神宮ノ前遺跡（14）が、沢べり遺跡の北東に位置する大山周辺の丘陵上には夏谷遺跡（35）・下張坪遺跡（34）が、四王寺山東麓から南麓には、不入岡遺跡（63）C地区・イザ原古墳群（53）が知られるなど遺跡数が増大する。墳墓は四隅突出型墳丘墓の可能性のある柴栗古墳群（22）内の埴丘墓、貼り石をもつ可能性のある三度舞埴丘墓（50）、吉備から搬入した可能性のある壺が出土した大谷後口谷埴丘墓群（58）がある。

古墳時代の集落は、前代から続く西前遺跡・夏谷遺跡・クズマ遺跡のほかに、桜木遺跡（13）・西山遺跡（11）・撫原遺跡（69）・宮ノ下遺跡（71）などが知られている。前期の首長墓は、沢べり遺跡の約1km南東の同一丘陵上に菱鳳鏡・三角縁神獸鏡・二神二獸鏡、多量の鉄器などが出土した国分寺古墳（70・前方後方墳、全長60m、出土品は国指定重要文化財）が存在する。他に沢べり遺跡北西の、四王寺山東麓には仿製三角縁神獸鏡・変形六獸



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1 イキス遺跡	11 西山遺跡	21 上神大将塚古墳	31 夷里第1遺跡	41 向山309号墳
2 上神古墳群	12 谷畠遺跡	22 柴架古墳群	32 米里第2遺跡	42 向山310号墳
3 上神44号墳	13 桜木遺跡	23 トドロケ遺跡	33 土下古墳群	43 和田東城跡
4 上神45号墳	14 上神宮ノ前遺跡	24 西前遺跡	34 下張坪遺跡	44 長谷遺跡
5 上神48号墳	15 伯尾山龜王塚跡	25 西前1号墳	35 夏谷遺跡	45 星喜山古墳群
6 上神51号墳	16 東狭間古墳	26 米里三ノ峠遺跡	36 大平ラ遺跡	46 星喜山9号墳
7 上神119号墳	17 猫山遺跡1次	27 米里銅鐸出土地	37 中峰古墳群	47 四王寺跡
8 クズマ遺跡1次	18 猫山遺跡2次	28 八幡山遺跡	38 和田城跡	48 大谷城跡
9 クズマ遺跡2次	19 猫山遺跡3次	29 若林遺跡	39 平ル林遺跡	49 大谷大将塚古墳
10 イガミ松遺跡	20 猫山遺跡4次	30 若林2号墳	40 向山古墳群	50 三度舞墳丘墓



第2図 沢べり遺跡第3次調査区位置図

51 イザ原遺跡	57 中尾遺跡2次	63 伯耆国府跡不入町道路	68 打塚遺跡	74 今倉遺跡
52 小林古墳群	58 大谷後口谷墳丘墓	64 伯耆国分寺跡	69 鞍塚遺跡	75 今倉城跡
53 イザ原古墳群	59 白市窓跡	65 国分寺北遺跡	70 国分寺古墳	76 北ノ城跡
54 沢べり遺跡1次	60 向野遺跡	66 伯耆国府闕遺跡1次	71 宮ノ下遺跡	77 空間田遺跡
55 沢べり遺跡2次	61 伯耆国府跡伯耆国庁跡	古神宮地区	72 河原毛田遺跡	78 打吹城跡
56 中尾遺跡1次	62 伯耆国府跡法華寺塙遺跡	67 古神宮古墓	73 島ノ掛遺跡	

鏡・碧玉製鉢形石・滑石製琴柱形石製品が出土した上神大将塚古墳（21・円墳、直径30m）、大谷大将塚古墳（49・前方後円墳・全長50m）などが知られている。また、猫山遺跡（17～20）・中峰古墳群（37）ではカスガイ状の周溝をもつ方墳群も確認されている。周囲の丘陵上には上神古墳群（2）・屋喜山古墳群（45）・向山古墳群（40）など多くの古墳群が知られ、大半は5世紀以降と考えられている。調査例では、沢ベリ遺跡から北西に谷を隔てた丘陵に位置するイザ原古墳群・小林古墳群（52）をはじめ夏谷遺跡・下張坪遺跡・西山遺跡・クズマ遺跡・若林遺跡（29）などがある。

### III 調査の概要

調査地の基本的層序は上から耕作土、黒色土（クロボク）、暗褐色土、褐色土（ソフトローム土）、黄褐色砂質土（ホーキ土）である。遺構検出は褐色土上面で行った。

調査の結果検出した主な遺構は、竪穴式住居3棟、掘立柱建物1棟、柵列1基、土壙1基などであった。

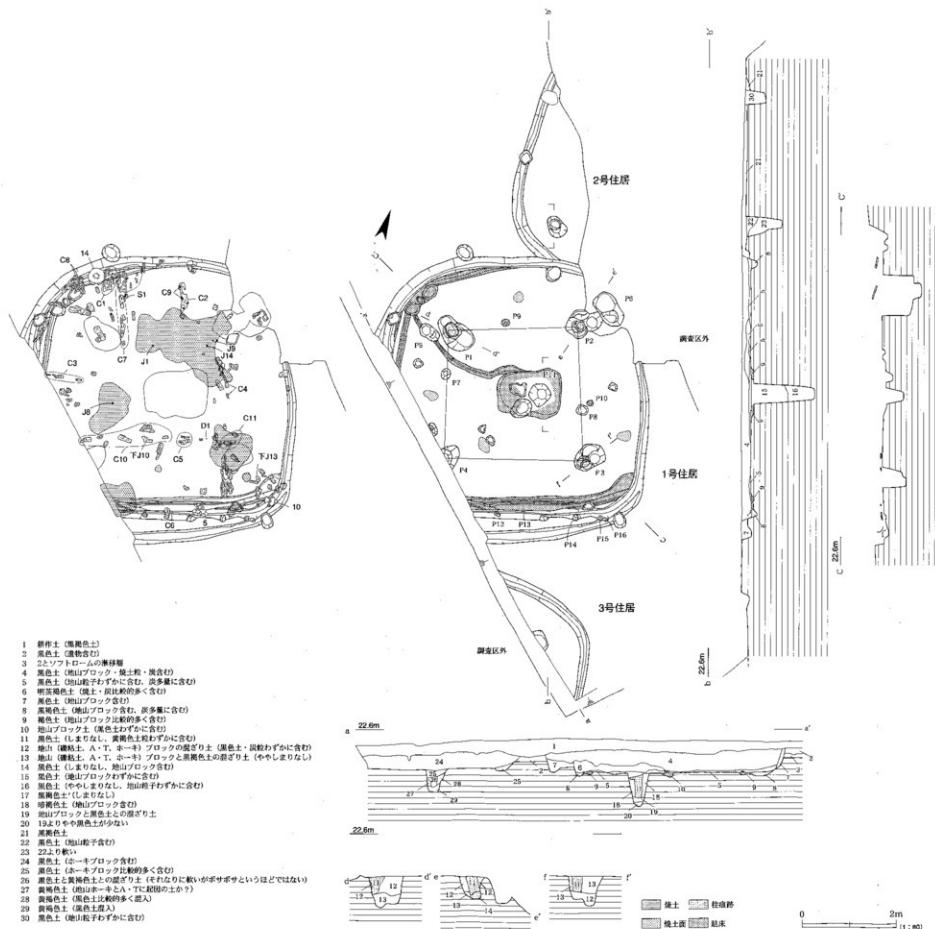
#### 1 遺構

1号住居 調査区の北側に位置する。南側が一部調査区外である。北隅は現在の畠への取り付け道により削平され床面を失っている。住居の平面形は確認できた3辺から一辺約6mの隅丸方形と推定される。覆土及び床面から多量の炭化材及び焼土が検出され、焼失住居と考えられる。周壁溝の重複などから最低でも4度の建替があったと考えられる。調査区際の断面観察（第3図a-a'）により古い段階が一番広い。次に南辺・西辺を縮小し段数ほぼ同規模で建て替え、最後は焼失する。住居の南北長は古段階で6.0m、焼失した最終段階では5.5mである。内側から3本の周壁溝は褐色土で貼床されていたため、縮小した後は徐々に拡大したと考えられる。

主柱穴はいずれの時期もP1～P4である。柱穴内に最終時の柱痕跡を確認した。主柱の距離はP1-P2・P1-P4で2.7m、P2-P3・P3-P4で2.8mである。P1・P3・P4は柱痕跡が掘り方底まで届いておらず、P1・P2の柱痕には住居中央に向かって転びが確認された。P7・P8は最終段階の補助柱、P9・P10は貼床されているため最終段階以前の補助柱と考えられる。中央ピットも2回作り直され、最終段階のP11は床面から1.3mと深い。住居北隅・西隅にあるP5・P6は貼床がされてなく、埋土が黒色土系であり、最終段階の住居に伴うと考えられる。柱痕などは観察できず、またP6下層から炭化材が出土したため住居使用時には開口していた可能性が考えられる。P12～P16は大きく縮小した南辺に沿って配置されている。ピットの直径は0.1～0.2m、住居内側から底までの深さは約0.1mである。縮小後の住居南壁を構成する土（第3図7層）は特に硬化した様子はみられず、壁に沿ったピット列は壁面を保持するためのものと考えられる。

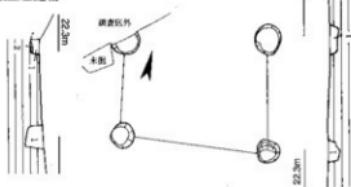
炭化材は、北辺で板材（C1・7・8）が多く出土している。板の幅は20cm、厚さは2～5cm、長さはC7から長さ1.3～1.5m程度に復元できる。C1・C8などは壁面、床面出土弥生土器鉢14によりかかった状態で出土している。C2の上には屋根材と考えられる草状のC9が直接乗った状態で出土している。C9の向きはC2の長辺に直交する。これらの板状炭化材は住居の中央部分には存在せず、壁材とも考えられるが、C2・C9の出土状況、壁面に沿って直立して出土したものがないことなどから、屋根の構造にかかわる材とも考えられる。その他では、住居南辺に沿って並ぶように出土したC5・C10・C11などは桁（梁）、住居外側から内に向かっている棒状のものC3・C6が垂木と推定される。

出土遺物は、床面から弥生土器壺部片3個体分、甕5、器台10、鉢14、砥石S1、作業台石などが出土した。鉢14は伏せた状態で出土した。甕5は口縁を上に向けてつぶれた状態で出土したため、正立して住居の端部分に



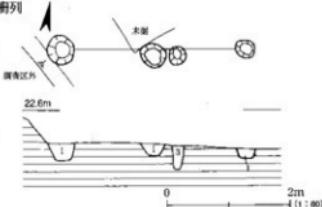
第3図 1号～3号住居遺構図

1号掘立柱建物

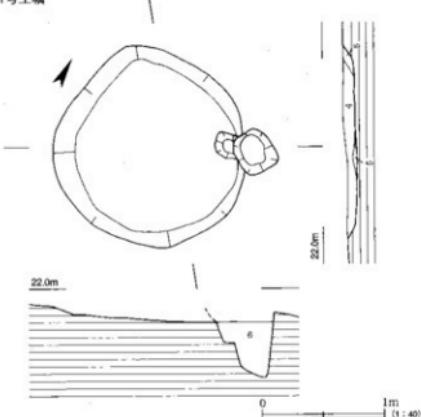


- 1 黒色土 (地山ブロック粒子ごくわずかに含む)
- 2 黄褐色土 (地山ブロック粒子多量に含む)
- 3 黑色土 (地山ブロック粒子含む)
- 4 黑色土 (ホーキブロック粒子ごくわずかに含む)
- 5 黄褐色土
- 6 黑色土 (地山ブロックわずかに含む)

1号柱列



1号土壤



第4図 1号掘立柱建物・1号柱列・1号土壤遺構図

置いてあったものと考えられる。他の土器もいすれも壁に沿って出土している。床面から焼土混じり層(第3図5・6層)にかけて、ガラス小玉14点J1～J14が出土した。ガラス玉の出土位置はまとまっていない。また、焼土混じり層の下から土玉D1が、住居覆土から鐵鏃F1が出土している。

**2号住居** 1号住居の北に位置する。1号住居に切られる。現県道とそれに伴う畠への取り付け道のため、大部分が消滅し、住居西辺部分のみ確認した。住居の平面形は遺存する西辺及び南隅から隅丸方形もしくは多角形と考えられる。南隅の柱穴が主柱と考えられるが、他の柱穴は不明である。また、検出面から床面までの深さも北隅で0.1mと浅い。覆土からは弥生土器壺15が出土した。

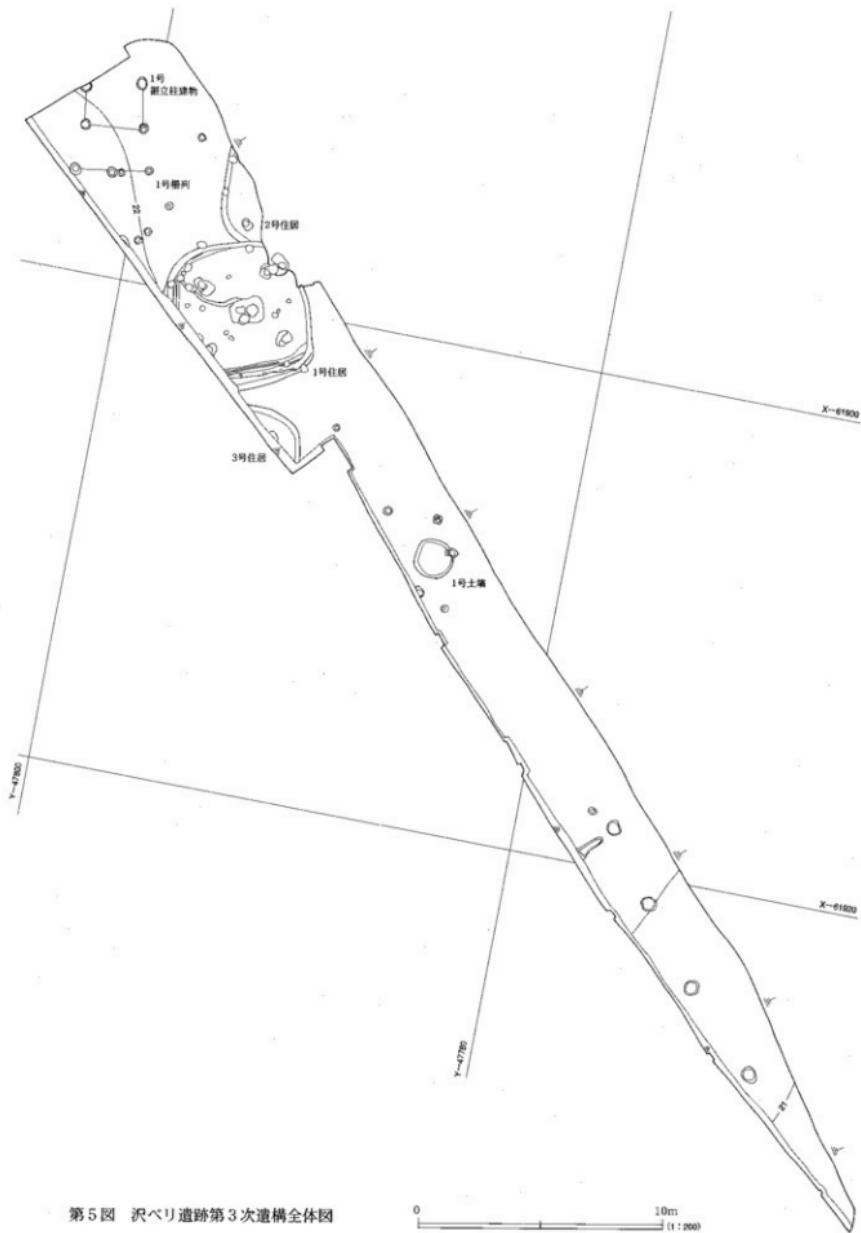
**3号住居** 1号住居からわずかに南に離れて位置する。大半は調査区外にあたり、北隅と主柱穴と考えられるピットを確認した。検出面から床面までの深さは0.1mである。覆土から石庖丁S8が、ピット埋土から弥生土器器台(もしくは高坏)16が出土した。

**1号掘立柱建物** 1号住居の北西約6mに位置する。1間×1間分を確認したが、調査区の関係で正確な規模は不明確である。ピット内から弥生土器小片が出土した。

**1号柱列** 1号住居の北西、掘立柱建物の南約2mに位置する。調査区内では2間分確認した。主軸方位は掘立柱建物に合う。ピット内から弥生土器小片が出土した。

**1号土壤** 1号住居から南東に10m離れて位置する。直径は1.5m、検出面からの深さは0.1mである。底面は浅い皿状だが、やや凹凸が目立つ。検出時には貯蔵穴と考えていたが、あまりに検出面から浅いため、土壤として報告する。埋土からは、弥生土器小片が出土した。

他にも住居群周辺(丘陵の頂部)で多数のピット群を検出した。建物・柱列などの可能性をもつが、調査範囲の狭さもあり、遺構としてまとまらなかった。



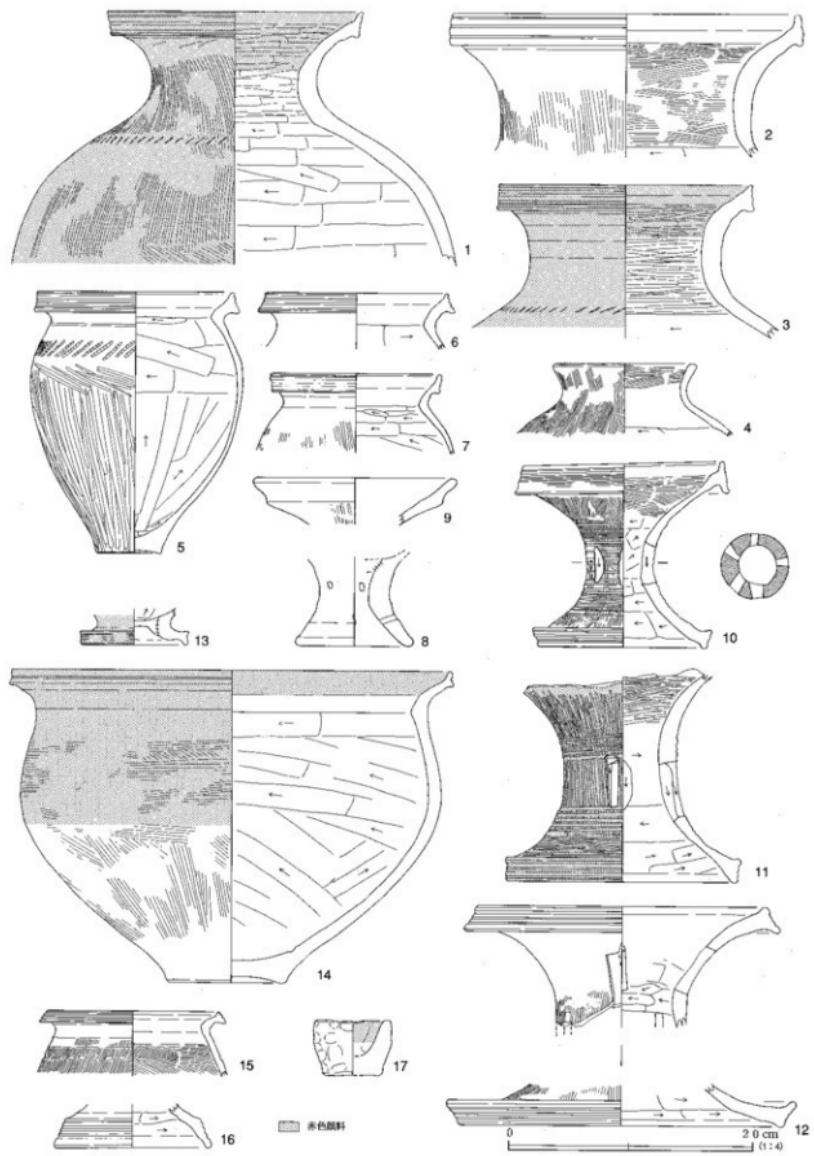
第5図 沢ベリ遺跡第3次遺構全体図

## 2 遺物

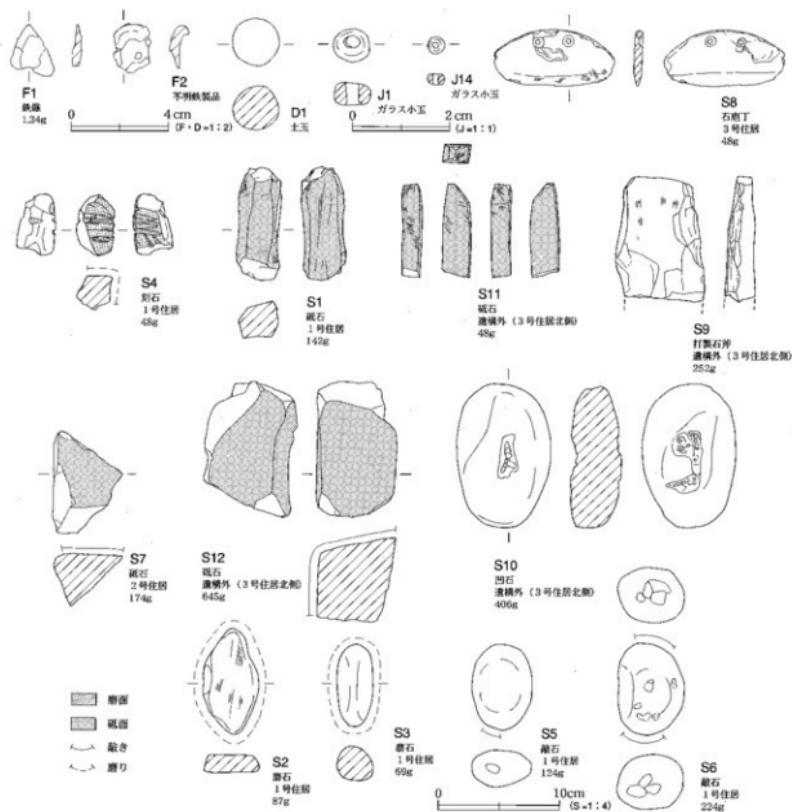
今回の調査では、弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪・鐵鍼・不明鉄片・ガラス小玉・石製品が出土した。土器・ガラス小玉の説明は観察表に一括した。

土器観察表

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 点	手 法	出土・地質・色調・埋没度
1号住居 (壁足)	1	壺	口径 20.7	口縁部は上下に軽張されれば直立する。 1・2は上方に長い、1・2は3条、3 は4条の腹凸線を施す。1・3には頸部 直下に其筋腹縫による跡み目がめぐる。	口縁部は頸部施文後ヨコナヂ。頸部外 面1・2にはハケメ内側の痕を残す。内 面は1・3には横方向のヘラミガキ。2は 横横方向のハケメ調整だが、単位の幅から 外表面のハケメとは原体が違う。体部内面 は頸部以下横方向のヘラケズリ。	粘土壠。1~6mmの砂粒多量に含む。茶 色粒子わずかに含む。燒成良好。淡白褐色。 外表面及び口縁部内面赤色顔料塗装。 口縁部3/4欠損。
	2	壺	口径 28.0			粘土壠。1~5mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡白色。口縁部欠損。
	3	壺	口径 20.4			粘土壠。1~5mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡白褐色。外表面及び口縁部内面赤色顔 料塗装。口縁部から焼失。
NW覆土	4	直口壺	口径 10.8	口縁部はやや外傾に質き、頸部は直 す。	体部外側は横方の横方向のハケメ。 ハケメは口縁部まで及ぶ。口部内面、 端面は横方向のハケメ。体部内面は横方 向のヘラケズリ。	粘土壠。1~3mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡褐色。口縁部3/5焼失。
床面	5	甌	口径 15.8 腹高 20.4	5・6は、口縁部は短く上下に抵抗され 内傾する。7は短く伸び、わずかに外傾する。5・6には4条、7は3条の 腹凸線を施す。5には頸部下端に細い凹 窓、その下には跡み目がめぐる。	口縁部は頸部施文後ヨコナヂ。7は腹 窓部は横方向のハケメ。8は頸 部直下から体部上端は横方向のヘラミズリ。 体部下半は豎方向のヘラケズリ。5は体 部外側最大腹窓部は横から斜め横方向の ヘラミズリ。体部下半は豎方向のヘラミガ キ。7は体部外側豎方向のハケメ。	粘土壠。1~2mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡白色。口縁部完。
SW覆土	6	甌	口径 14.7			粘土壠。1~2mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。外表面に凹溝付、口部1/4欠損。
SW覆土	7	甌	口径 13.6			粘土壠。1~2mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡褐色。外表面口縁部以下僅付着、 口縁部1/4焼失。
最下層	8	高杯	脚端径 9.0	高杯の脚端。下に向かってゆるやかに開 き、底部はくさくある。底径5~6mm の円錐の通し穴を2個に施す。透は上下段 と4方で封定される。	底部内面はナデ仕上げで磨面平滑。外表面 脚部はナギ、内面はヘラケズリ後ナギ。	粘土壠。1~2mmの砂粒比較的多量に含 む。黒茎葉細胞多く含む。燒成良好。淡 褐色。脚部1/5焼存。
SW覆土	9	蓋台	上台部径 16.0	底面部にある部分に施した光模の痕跡が みられないため、蓋台上部と考えられ る。外上方にまっすぐ伸び、端部は丸く おさまる。外面に斜め段もつ。	内面はナデ仕上げと退われれるが底面平滑。 外表面、段より上は横方向のナギ。段より 下は豎方向のヘラミガキ。	粘土壠。1~1mmの砂粒含む。燒成良好。淡 褐色。口縫部のみ採付着。上台部 1/2焼存。
店面	10	七合部径 16.2 脚端径 13.1 脚高 15.1		脚部は比較的長く透がめぐり、上台 部・脚台部は外反しながら聞く。端部は 上下に肥厚し、内縫もしくは直立する。端 部上面には脚端縫を施す。10は長横円形の 内縫を施す。透の脚端部は等ではない。 11は長方形の4方透して、内面を面取り する。12は長方形の4方透が上下2段に 施される。11は上台部を欠損するが、 側面が縮減しているため、欠損状態のま ま使用していたと考えられる。	10の外表面は、横方向のハケメの後透しを施 し、その後脚端部を施す。透は上台 部16.2は1条4つ。それ以下は上から下 に横縫に施される。11は外側ヘラミガ キ半上台部と脚部の間に横縫状の切跡が 脚部と脚台部の接には5条の縫隙部を有 す。上の脚部2重で裏書きされている。 12は上台部を欠損する。12は内縫が横 方向透して施す。12は脚部内面に横縫状 のハケメが残る。上台部内面 は、10はハケメ、11はヘラミガキ。12 は横19mm程度の横状工具によるナギ。脚部 と脚台部内面はヘラミズリし、脚部はヨ コナヂ。内面と外表面共。	粘土壠。1~6mmの砂粒多量に含む。1~ 2mmの砂粒含む。燒成良好。淡褐色。 色から褐褐色。脚部外側にわずかに赤色 顔料の遺存する。口縫部完。
SW覆土	11	脚台部径 18.5				粘土壠。1~6mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡褐色。外表面赤色顔料塗装。上 台部欠損。脚部一欠損。
NW覆土	12	上台部径 23.2 脚台部径 26.2				粘土壠。1~3mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。黄褐色。上台部1/3、脚台部 1/4焼存。
(復元)	13	脚台部	脚台部径 6.4	脚部は曲溝しながら丸く聞き、脚部 は短く下に抵抗する。脚部には3条の履 跡を施す。底部は直角径4cmの円孔を 充填している。台面の施文跡か。	底部内面はヘラケズリ後ナギ。脚台部は ヨコナヂで、脚部の腹縫は不明顯。	粘土壠。1~2mmの砂粒多量に含む。茶 色粒子含む。燒成良好。淡褐色。外表面赤 色顔料塗装。脚台部1/2焼存。
床面	14	甌	口径 35.6 腹大脚径 34.3 腹高 9.2 脚高 25.6	脚部は外へ崩く聞き。底部には内縫気味 に上下に抵抗する。底部には1条脚縫が施 されれる。底脚径はやや低く、脚部 下部はよくすばまる。底部はやや上へ引 だれる。	口縫部ヨコナヂ。外表面脚部は横方向。 下半は豎方向のハケメ。内面脚部上半は 横方向のハケメ。下半は下から上へ 斜め方向のヘラケズリ。	粘土壠。1~4mmの砂粒多量に含む。燒 成良好。淡褐色。体部外表面半から口縫 部内面まで赤色顔料遺存する。口縫部 1/2欠損。
2号住居 E覆土	15	壺	口径 14.0	口縫部はねあげ口縫で、端部には3条の 腹凸縫を施す。冒部に棒鉄工具による刻 み跡がめぐる。	口縫部ヨコナヂ。对部外表面は豎方向のハ ケメ。体部内面は横方向のハケメ。	粘土壠。1~2mmの砂粒わずかに含む。 燒成良好。淡褐色。外表面ヨコナヂ付着。 口縫部~脚部上半約1/5焼存。
3号住居 ピット埋土	16	蓋台 または 高杯	脚台部径 12.2	底部は底盤で、体部はわざかに内溝しな がら上へ立ち上がる。底部は面をなす。	内面は横方向のヘラケズリ。底部ヨコ ナヂ。	粘土壠。1~2mmの砂粒多量に含む。茶 色粒子含む。燒成良好。淡褐色。脚部 の僅付着。脚部1/2焼存。
遺構外	17	配土器 鉢	口径 5.5 腹高 4.5		内面指脂サエのナギ。	粘土壠。黒茎葉細胞の粉粒含む。燒成良好。 口縫部から内面にかけて赤色顔料塗装。 約1/4焼存。



第6図 出土遺物1



第7図 出土遺物2

ガラス小玉一覧表

JNo.	出土位置	色調	長さ	直 径	孔 径	その他の
1	NW最下層	不透明 暗水色	4.4	7.2~6.5	2.5~2.1	
2	燒土疊じり層もしくは底下層	不透明 暗水色	3.6	5.7	1.8~1.9	
3	SW覆土	不透明 明水色	3.4	5.4~5.1	2.0	
4	燒土疊じり層もしくは底下層	不透明 明水色	2.6	5.2~4.9	1.9	
5	NE覆土	不透明 暗水色	3.4	4.9~4.7	1.4~1.3	
6	NB覆土	透 明	2.9	4.0	1.3	
7	燒土疊じり層もしくは底下層	透 明 緑水色	2.5	4.3~4.0	1.1	
8	NW蓋下層	不透明 明水色	2.5	3.9	1.1	
9	不透明 明水色	2.5	3.6	0.8		
10	炭化材の下、床面	不透明 明水色	1.8	3.8~3.5	1.4~1.3	
11	周壁溝埋土	不透明 明水色	1.7	3.9~3.6	1.0~0.8	断面形やや歪つ。
12	周壁溝理土	不透明 明水色	2.9	2.9	1.0	器壁薄い。断面長方形。約1/2欠損。
13	炭化材の下、ほぼ床面	不透明 明水色	1.9	2.6	1.0	
14	NW底土層	不透明 甜青色	2.0	3.4~3.2	0.9	

## IV 鑑定

### 沢ベリ遺跡第3次1号住居から出土した炭化材の樹種同定

植田弥生（株式会社パレオ・ラボ東海支店）

#### 1はじめに

当遺跡は倉吉市不入岡に所在し、久米ヶ原丘陵の東端の標高23m前後に位置している。ここでは、出土遺物から弥生時代後期前葉と比定される1号住居から出土した建築材6点の、樹種同定結果を報告する。6点の炭化材は、1号住居出土炭化材のうち比較的の保存がよく使用時の形状が判り、出土状況から主要な建築材であったと考えられる材である。

当地域一帯には、弥生時代後期から古墳時代の住居跡が数多く出土し、建築材樹種の調査が蓄積されつつある。今回の調査も当地域の建築材樹種利用の全体像と特徴を理解するための蓄積資料のひとつとなる。炭化材の樹種同定と、今までに報告されている周辺遺跡の樹種と若干の比較を行った。

#### 2 炭化材樹種同定の方法

先ず、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ・シノキ属などは、横断面の管孔配列が特徴的なのでその典型的な材は、実体顕微鏡下の観察で同定可能である。それ以外の分類群や確認をする材については、3方向の断面(横断面・接線断面・放射断面)を走査電子顕微鏡で拡大し、材構造を観察して同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3方向断面を5mm角以下の大さに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

#### 3 結果

検出された分類群は、落葉広葉樹のクリ・クワ属・モクレン属・キハダの4分類群であった。

板状で住居の外周付近から出土した壁材もしくは屋根材と推定されるC1とC2はクリであった。住居内部から出土した棒状で軸・梁と推定されるC4はクワ属、C5はモクレン属であった。棒状で住居の外周付近から出土し重木と推定されるC3はクリ、C6はキハダであった。

モクレン属の材は、一部破片の放射方向の径は4.5cmで40年輪数以上が数えられ、かなり樹齢の多い木であったと考えられる。それに比べクリ、ヤマグワ、キハダの年輪幅は広く、特にキハダは放射径が4.5cmで6年輪が数えられ非常に年輪幅は広かった。

#### 4まとめ

1号住居から出土した主要な建築材6点は、クリ3点(C1～C3)、クワ属1点(C4)、モクレン属1点(C5)、キハダ1点(C6)であった。板状で出土した2点(C1・C2)はいずれもクリであったが、棒状で出土した炭化材はクリ・クワ属・モクレン属・キハダの複数の種類が使われていた。検出された分類群は、広葉樹材の中でも特に耐久性や耐湿性にすぐれた材質で知られており、建築材として有用な樹種を選択していた事が判った。またこれらの樹種は木材部だけではなく、例えばクリ・クワ属は果実が食用になり、クワ属の葉は養蚕に、モクレン属のホオノキやコブシの果実部やキハダの内皮は薬用の効果があり、いずれの樹種も染料となるなど、利用度の高い樹種である共通性がみられた。従って、当時の人々にとって非常に存在感のある樹種であったと思われる。

周辺遺跡の中尾遺跡(1992)・夏谷遺跡(1995)・下張坪遺跡(1996)・両長谷遺跡(1996)などでは主に弥生時代後期の住居跡の建築材樹種が、また当遺跡に近い不入岡遺跡(1995)では古墳時代の住居建築材が報告されている。これらの遺跡からは、針葉樹のヒノキ属、常緑広葉樹のシノキ属・アカガシ亜属、落葉広葉樹

のクリ・ヤマグワ・サクラ属など非常に多くの種類が検出されている。また各住居ごとに検出された樹種の構成は、異なるという特徴が知られている。当住居の調査においても6試料から4分類群が検出され、利用樹種が多様であった傾向が読み取れた。今回検出されたキハダは周辺遺跡から報告されていないが、クリ・ヤマグワ・モクレン属は複数の遺跡から報告されている樹種であった。当住居では、調査した6点中の3点がクリで多い傾向がみられた。クリの出土がやや目立つ住居跡は、夏谷遺跡と中尾遺跡に見られる。周辺遺跡から普通に検出されているシノキ属など常緑広葉樹は、6試料の中には見出せなかった。

当遺跡から北東方向の日本海側に近い羽合町の南谷大山遺跡（1993）・南谷大山遺跡II（1994）や泊村の石脇第3遺跡・石脇第1遺跡（1998）からも、当遺跡とほぼ同時期の住居跡が出土し、建築材樹種が報告されている。これらの遺跡では、針葉樹のスギと常緑広葉樹のシノキ属の特にスダジイの出土が顕著であり、当遺跡周辺地の住居建築材とは樹種利用の傾向に違いが見られる。この要因として、遺跡周辺の植生の違いや、集落で利用していた森林地の違いなどが想定されるのであろうが、これらの解明にも木材利用の情報の蓄積が必要な段階だと思われる。

建築材の樹種選択には、強度や耐久性・耐水性などの要素のほかに、加工したい形状の作りやすさなどが影響していると考えられる。当遺跡では板状の材は2点ともクリが使用されていたが、中尾遺跡ではヤマモガシ類似種が報告されている。南谷大山遺跡から出土した垂木（板状？）はスギが多くカシ類（シラカシ？）・ヤマグワもあり、南谷大山遺跡IIではシラカシが報告され、石脇第1遺跡・石脇第3遺跡では板状の構造材はすべてスギであった。垂木や桁・梁は、これらの遺跡では常緑広葉樹のスダジイが圧倒的に多く、このほかに針葉樹のスギ・ヒノキや落葉広葉樹のヤマグワ・ケヤキそして常緑広葉樹のタブノキなどが検出されている。当住居の垂木や桁・梁は、落葉広葉樹のクリ・クワ属・モクレン属・キハダが使われていた。利用優先樹種に違いが見られるが、板材にはスギ・クリ・ヤマグワ・カシ類の縦方向に割裂性の良い樹種が利用され、丸木状で使用できる垂木・桁・梁には複数の広葉樹材が利用されている傾向が読み取れた。

#### 参考文献

- 『中尾遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1992
- 『不入岡遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1995
- 『夏谷遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1995
- 『下張坪遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1996
- 『両長谷遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1996
- 『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24～28号墳』 財団法人鳥取県教育文化財団 1993
- 『南谷大山遺跡II・南谷29号墳』 財団法人鳥取県教育文化財団 1994
- 『石脇第3遺跡一森末地区・綾り地区一石脇8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石脇第1遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団 1998

## V　まとめ

各遺構の出土遺物の時期は、まず、2号住居出土の甕15は、口縁端部が短く上下に拡張され内傾する面をなし、擬凹線を施す。体部は外面ともハケメ調整で、弥生時代中期後葉と考えられる。1号住居床面出土の甕5は口縁端部は同様に短く内傾し、端面に擬凹線を施す。体部内面は頭部直下までヘラケズリし、阿弥大寺Ⅱ期（<sup>見出</sup>弥生時代後期後葉）と考えられる。3号住居出土の器台16（もしくは高杯）は、脚台端部は直線的に延びる二重口縁状を呈し擬凹線をめぐらせる。1号住居のものに比べて後出的である。

住居群は、出土遺物から、弥生時代中期後葉から後期にかけて2号→1号→3号の順につくられていることが分かった。出土土器から掘立柱建物、櫛列、土壙なども住居群と同様の時期が考えられる。

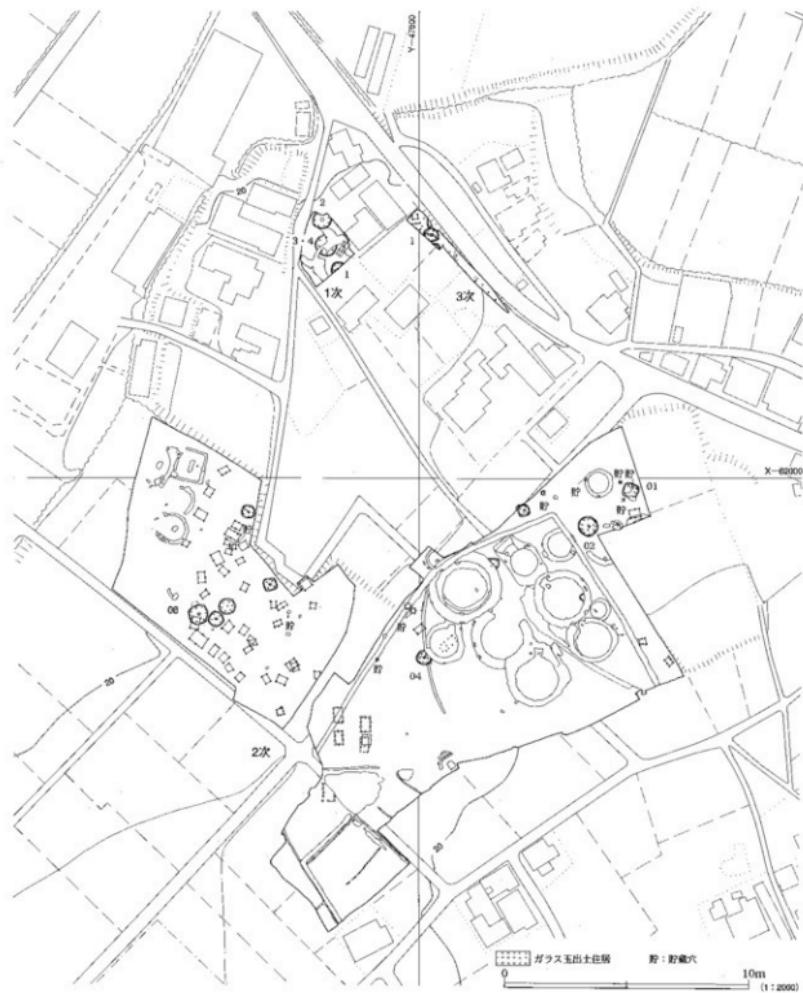
1号住居は焼失住居で、炭化材の出土状況から板状の屋根材と考えられる部材が住居北西隅を中心に出土した。<sup>〔4〕</sup>南谷大山遺跡例でも板材が出土しているのは住居北辺で、今回の調査結果と一致する。炭化材の上には焼土混じり層が存在する点も共通するが、住居の全体的な構造を推定するには、1号住居は炭化材、焼土などの遺存状況が良くないため、共通点を指摘するにとどめる。

今回の調査で確認したものを含め沢ベリ遺跡全体では、弥生時代中期後葉から後期にかけての竪穴式住居を17棟確認したことになる。各調査地間の状況が不明であるが、これらの住居群は低丘陵の北端に存在し、同一集落として考えて良いと思われる。その内、平面形が多角形もしくは円形で床面積が30m<sup>2</sup>以上の大型の住居4棟（うち1棟は建替）。1次2号住居、1次3号・4号住居、2次S I 02、2次S I 08）が、集落の北・南東・南西の3ヶ所に、それぞれの中心間距離が約150m～160mのほぼ等間隔で離れて存在している。また、5棟では（1次1号住居・2次S I 01・2次S I 02・2次S I 04・3次1号住居）ではガラス玉が出土している。集落の範囲が確定してはいないものの、集落の規模は比較的大きく、ガラス小玉の出土住居も多い。周辺の地形も緩やかで、水田耕作の可能な部分が広く近い。居住するには好条件な立地といえる。しかし、次の古墳時代前期に属する住居が存在せず、集落の存続期間は短い。集落の存続期間については、周辺の比較的標高の低い丘陵に位置する集落遺跡（中尾遺跡・イザ原古墳群）についても同様に弥生時代中期後葉から後期の短期間で姿を消している。周辺の弥生時代終末期、古墳時代前期以降の集落遺跡としては沢ベリ遺跡から北東に1.1km離れた夏谷遺跡、同じく南西に1.3km離れた擣塚遺跡、宮ノ下遺跡などがあげられる。周辺地域の様相を明らかにするためにも沢ベリ遺跡は重要な遺跡であると考えられる。

また、今回の調査区南側では、埴輪片や、奈良・平安時代の土器片が出土しており、調査区周辺に遺構が存在するものと考えられる。沢ベリ遺跡の詳細な分析なども含め、今後の課題としたい。

### 註

- 岡本智則 「和田・不入岡地区」『倉吉市内遺跡分布調査II』 倉吉市教育委員会 2001
- 眞田廣幸 『沢ベリ遺跡発掘調査概報』 倉吉市教育委員会 1975
- 岡本智則 「沢ベリ遺跡2次調査（D地区）」『不入岡遺跡群発掘調査報告書—不入岡遺跡・沢ベリ遺跡2次調査一』 倉吉市教育委員会 1996
- 浅川滋男 「焼失竪穴式住居の復元—AS I 01とBS I 20にみる二段伏屋式構造—」『南谷大山遺跡II・南谷29号塙』 烏取県教育文化財団 1994
- 米田規人他 「南谷大山遺跡・南谷ヒジリ遺跡・南谷22・24～28号塙」 烏取県教育文化財団 1993
- 土井珠美 「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について発表記録』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986



第8図 沢べり遺跡1～3次遺構全体図

沢ベリ遺跡第3次

調査前全景

(北西から)



調査後全景

(北西から)



1号～3号住居

(南東から)



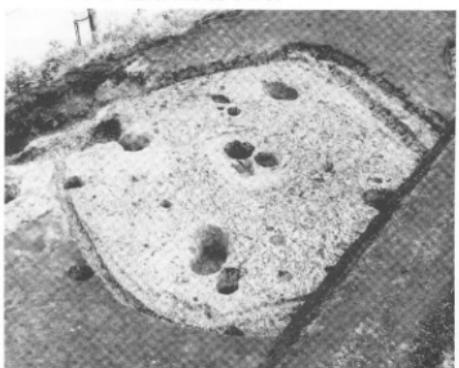
図版2



1号住居炭化材・遺物出土状況（西から）



2号住居（西から）



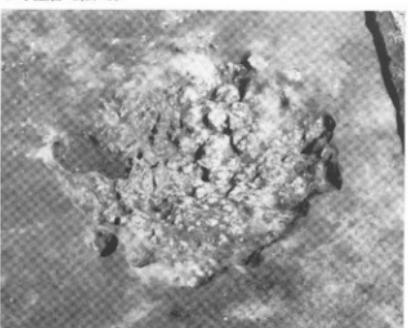
1号住居完掘（西から）



3号住居（東から）



1号掘立柱建物・1号柵列・ビット群（南西から）



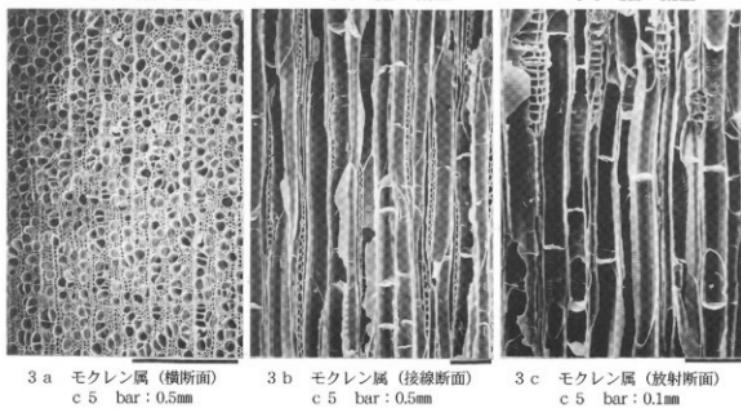
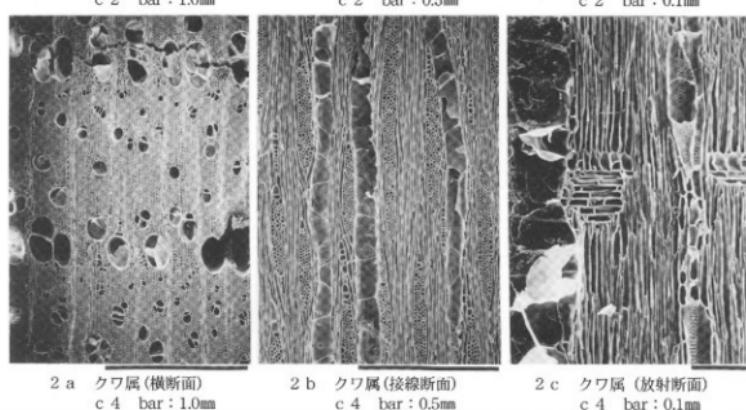
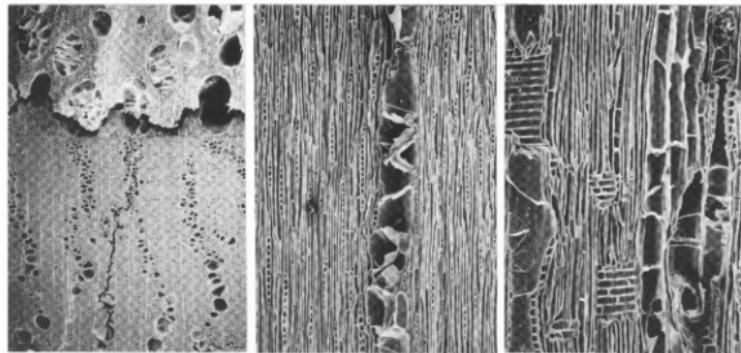
1号土塘（北西から）



(F1・F2・J1~J14・D1) 1:1、(S8) 1:2

図版4

炭化材の顕微鏡写真1



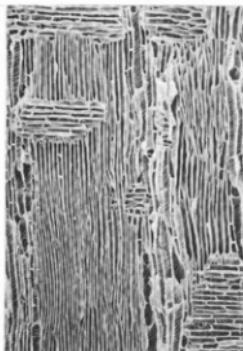
炭化材の顕微鏡写真2



4 a キハダ (横断面)  
c 6 bar : 1.0mm



4 b キハダ (接線断面)  
c 6 bar : 0.5mm



4 c キハダ (放射断面)  
c 6 bar : 0.5mm

図版5

2/10.2  
V  
Kur  
(1/10)  
図書館

### 報告書抄録

審査名	阿ベリ道路第3次免許調査報告書						
調査名	主要地方道倉吉由良線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査						
番号	-						
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第110集						
編著者名	岡平拓也						
原稿機関	倉吉市教育委員会						
所在地	〒682-8611 鳥取県倉吉市葵町722番地 TEL0858-22-4419						
発行年月日	西暦2001年3月23日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
阿ベリ道路 第3次	倉吉市不入脚字阿ベリ	31203 : 3N023	35° 29' 27"	133° 48' 24"	20000617~20000619	160m <sup>2</sup>	主要地方道倉吉由良線緊急地方道路整備工事
所収遺跡名	種別	主な時代：主な遺構	主な遺物			特記事項	
阿ベリ道路 第3次	集落	弥生・加六式住居 3棟 獨立柱建物 1棟 構造 1基 土塁 1基	弥生土器、土師器、灰壺器、鐵器、ガラス小玉、土玉、石芯 打製石斧、砾石、鐵石、四石				集落の時期は弥生中期後葉～後期中葉。 加六式住居1棟は焼失しており、鐵器 1・ガラス小玉4・土玉1が出土した。

## **沢ベリ遺跡第3次発掘調査報告書**

主要地方道倉吉由良線緊急地方道路  
整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査

平成13年3月23日 印刷  
平成13年3月23日 発行

編集 倉吉市教育委員会  
発行

印刷  
製本 有限会社 ハワイ印刷